

平成29年度 北海道大学医学部医学科入学式告辞

希望に胸を膨らませ喜びに目を輝かせている皆さんをお迎えし、本日、ここに入学式を挙げてきますことを大変嬉しく思います。新入生の皆さん、北海道大学医学部医学科への入学、おめでとうございます。医学部教職員一同を代表してお祝い申し上げます。皆さんをここまで育て上げられましたご両親をはじめご家族の皆様にも心からお祝い申し上げます。また、ご来賓の北海道大学医学部同窓会長 浅香正博先生には、ご臨席を賜り、感謝申し上げます。

北海道大学医学部は、1919年に北海道帝国大学医学部として設置されました。再来年の2019年には創立100周年を迎える我が国屈指の歴史と伝統を誇る医学部であります。すでに9,000名を超える卒業生が巣立ち、約6,000名の同窓生が日本全国はもとより世界各地で活躍しております。皆さんは医学部医学科第99期生として、これから医学を学んでいくこととなります。

まず、皆さんに「学ぶこと」についてお話ししたいと思います。

現代は正解なき時代であります。したがって、あらかじめ存在する正解を探す受け身の学びから主体的な学びへの転換（シフト）を図らなければなりません。

現在、大学は「能動的な学び」をどのように推し進めるかを模索しています。能動的学習（アクティブ・ラーニング）が米国で注目されたのは1990年代であり、決して目新しいものではありません。しかし、日本ではこれまで、教員は教育を、学生は学習をと両者を区別してきました。中央教育審議会（中教審）は、それに対して「能動的学習」（習う）を「能動的学修」（修める）へと文字を変更しました。まさしく、「学習」におけるパラダイムシフトであります。

しかし、中教審答申も能動的学修の必要性を強調しながらも、どのように促進するかの具体的な提言は行っておりません。これは、各大学の自主性にまかせているからだと説明していますが、つまり、この問題にも正解はないということでもあります。

大学では、これまで「想定される正解」を重視した教育が行われてきました。しかし、東日本大震災の教訓から、大学はもっと「想定外」について議論し、その重要性について教育を通して、社会に発信する場でなくてはならないことを学びました。定説ばかりを追従するようでは優れたリーダーシップを発揮できないことが明らかになったのです。

米国コロンビア大学の歴代総長は、新入生へ向かって、「定説を覆しなさい」と必ず冒頭で教訓しています。覆らないから定説となっていますが、はじめから覆らないと考えていては学問に進歩はありません。定説打破、それも権威ある一見不動の定説の打破こそ今、最高学府に求められているものなのかもしれません。

では、「習う」学習ではなく、「修める」学習とはどのようなものなのか。獲得した知識を、個人の中で完結させるのではなく、自主的な次の行動につなげなければなりません。学び得た知識や能力を統合し、新たなものに展開させることを心がけてください。一日も早くそれらの能力を涵養し、不断の努力でそれに磨きをかけてほしいと思います。これまで知識量の多寡が人の能力

を判断する尺度とされ、ヒトを評価してきました。しかし、現代の情報社会においては、いつでも、どこでも必要な情報を瞬時に得ることができるようになりました。したがって知識量の多寡によってヒトを評価することはできなくなっています。情報・知識を分析し、それらを取捨選択し、さらに統合し、新たな智を創造して展開する能力こそが、まさに今求められているのです。それらの能力を獲得するには「能動的学修」アクティブ・ラーニングが必要となるのです。

次に、北海道大学医学部医学科の学生として、「医学を学ぶこと」についてお話ししたいと思います。

北海道大学医学部医学科は、ただ単に医師の養成を目的にしているわけではありません。優れた臨床能力を持つとともに、研究を通じて医学・医療の進歩に貢献できる指導的な医師ならびに研究者の養成を目指しています。また、これは国民から期待されている使命でもあります。

北海道大学医学部に入学した皆さんには、これら目標の具現化という国民から負託された大きな使命があることを肝に銘じてください。現在、世界最高レベルにある日本の医療は、時代を超えて脈々とこの使命を果たしてきた多くの先輩によって、築かれてきたものです。皆さんはこれから、この使命を果たしている多くの先輩に出会い、刺激・指導を受け、そして立派な医師に育っていくでしょう。今度は皆さんの番です。皆さんがこの使命を果たしていくことになるのです。

まず、第一に幅広い基礎学力を身に付けなければなりません。広く堅固な裾野があってはじめて高い山が存在するように、医学とその実践である医療もしっかりとした土台無しに高みに到達することはできません。

第二に国際性を身に付けて下さい。国際性の涵養は北海道大学の基本理念の一つでもあります。グローバル化が進展する今日では、医学研究や医療の実践にも国際水準が求められています。医学部の教育目標には地球規模で貢献できるグローバルな人材を育成することをも包含されています。では、グローバルな人材とはどのような人材でしょうか。重要な要素は、コミュニケーション手段として一定の英語力はもちろん、幅広い教養や専門性を持ち、多様な人種や文化を理解して受け入れ、自主性と協調性の双方を持って行動できることが挙げられます。これら国際性の涵養には、これから総合教育部で学ぶ自然科学、人文科学、社会科学が必須です。ですから、まずは、基礎教養科目をしっかり学んで幅広い教養を育てて欲しいと思います。

さらに、医師にとって不可欠な、温かい思いやりの心と病める人を包容できる豊かな人間性・高い倫理観を培わなければなりません。

より良い倫理的行動をとるためには、個々の倫理的問題解決能力の向上を図ることが必要とされています。倫理的問題解決のための倫理的行動の要素の一つに倫理的感受性があります。倫理的感受性は、文化、宗教、教育、人生経験などによって影響されるとされています。倫理的感受性を高めるには、日頃より倫理的な問題を意識し、経験し、解決策を悩み模索し、倫理教育の必要性を身をもって実感することが必要といえます。倫理的感受性の獲得は、まさに日々の学生生活すべての関わりの中に存在し、それを意識するかしないかにかかっているといえるでしょう。

「医学を学ぶこと」はまさに生涯学修です。医学が高度に複雑化した現在、医学を学ぶ最終教育課程は学士課程ではなく、大学院博士課程です。北海道大学医学部卒業生の多くは、卒業後の研修の一時期において大学院博士課程に進み、「研究」という批判と論理の世界を経験して洞察力、批判力と応用力を身につけ、先程述べた使命を果たす実力を養っています。真に医学・医療の進歩に貢献できる指導的な医師となるために、また生涯「学ぶ力」を培うため大学院博士課程を大いに利用してほしいと思います。

最後に、札幌農学校の初代教頭であったクラーク博士が唱えた“lofty ambition”（高邁なる大志）という言葉は世紀を超えて北海道大学を揺るぎなく支えてきた理念であります。この言葉を大切に、大きな夢と高い理想を持ち、自らの持てる能力を最大限に発揮することを心がけ、自然に恵まれた広大なキャンパスで学生生活を謳歌していただきたいと思います。皆さんが6年後に揃って医学部を卒業し、信頼される医師として巣立っていかれることを祈念して、私の告辞とします。

平成29年4月7日

北海道大学医学部長 吉岡 充弘